

# 令和4年度全国学力・学習状況調査における

## 北九州市立 洞北 中学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、令和4年4月19日(火)に、3年生を対象として、「教科(国語、数学、理科)に関する調査」と「生徒質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思っております。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

### 1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

### 2. 調査内容

- (1) 教科に関する調査(国語、数学、理科)

教科に関する調査(国語、数学、理科)
①身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等 ②知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等に関わる内容

※調査では、上記①と②を一体的に問うこととする。

- (2) 生徒質問紙調査

生徒質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

### 3. 教科に関する調査結果の概要

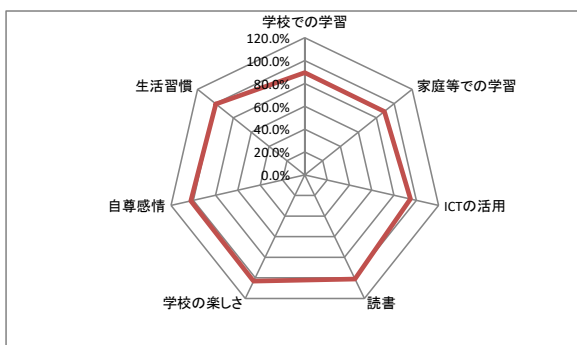
#### (1) 全国・本市の学力調査(国語、数学、理科)の結果

本年度の結果	国語		数学		理科	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	9.3	66	6.6	47	9.8	47
全国	9.7	69	7.2	51	10.4	49

#### (2) 本校の学力調査結果の分析

国語	全体的な傾向や特徴など	・問題をよく読み、内容を理解しようとしている傾向が見られ、全く解けなかった生徒は、事象や行為、心情を表す語句について理解することや場面、場面で的心情の変化などについて理解することにやや課題が見られる。相手の立場に立って、登場人物の心情を伝え合うなどの活動やその心情や発言の意図を考えて書く活動を行うことで、より一層の伸長が期待できると考えられる。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	・聞き手の興味・関心などを考慮して、表現を工夫する問題や文脈に即して漢字を正しく書く問題では全国よりも正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	・場面の展開や登場人物の心情の変化などについて、描写を基に捉える問題や漢字の行書とそれに調和した仮名の書き方を理解する問題で全国よりも正答率が低かった。	
数学	全体的な傾向や特徴など	・正解数が0~1問のみの生徒が全体の約1割程度いる。数と式を使って解く問題やデータの活用をして解く問題は、解ける生徒が多いのに対し、図形を解く問題や関数を使って解く問題にやや課題が見られる。成績に2極化が見られ、低位層の生徒たちへの基礎学力を定着させる指導を行うことが必要であると考えられる。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	・自然数を素数の積で表すことができる問題やデータの傾向を的確に捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することができる問題では全国よりも正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	・連立二元一次方程式を解く問題や証明の根拠として用いられている三角形の合同条件を理解する問題では全国よりも正答率が低かった。	
理科	全体的な傾向や特徴など	・分野別に見ると、一部偏りがあるが、おおむね平均的に習熟できていると言える。実験の考察や予想と自分の考えの比較などを考えることができている生徒が多い。反面、分子モデルで表した粒子における問題を中心に課題が見られた。分野における部分的な補充学習を行うことでよりよい方向へ改善が期待できると考えられる。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	・静電気に関する問題やモデルを使った実験において、実験の計画ができるかどうかをみる問題、気圧に関する問題、気象現象を観測データを用いて判断する問題等で、全国よりも正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	・化学変化に関する問題や課題に正対した考察を行うためのグラフを作成する問題、岩石に関する問題、地層の傾きを分析する問題等で全国よりも正答率が低かった。	

### 4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要



質問紙調査の結果分析
<ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭を中心に自分で計画的に学習する習慣があまりない生徒が全国と比較すると多い傾向にある。学習計画を立て、自分の将来のために学習活動を行う指導が必要であるため、AIDドリル等を活用した補充学習が効果的であると思われる。</li> <li>・スマートフォン・携帯電話の所持率が増加傾向にある中、平日でのSNSや動画視聴時間が1時間未満の割合が全国よりも多い。今後も情報モラルを考え、利用していくよう、継続指導していく必要がある。</li> <li>・学校に行くのは楽しいと思う生徒が全国より高い。今後も学校と家庭と地域で連携して、活気のある学校を目指していきたい。</li> </ul>

### 5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

#### ① 教科に関する取組

○朝自習で基礎学力を養う学習プリントの実施を今後も継続して行うとともに、タブレットを活用したAIのドリルなどの活用「洞北タイム」を全学年で実施していくように提案し、学力向上に繋げていく。  
 ○洞北プロジェクトで推進してきたICTを活用した授業づくりと話し合い活動の取組を通して、視覚的にも生徒にとって分かりやすい授業の研究を継続して行っていく。

#### ② 家庭生活習慣等に関する取組

○スマートフォン・携帯電話の所持率の増加とタブレットを使っている活動の普及に伴い、充実した活動に繋げさせるため、今まで以上に情報モラル学習の徹底を行う必要があると考えられる。また、家庭や地域に啓発活動を行うことが望ましいと考える。  
 ○家庭学習計画表の活用において、利用の仕方のマニュアルなど再検討し、充実した自主学習に繋げるようにしていく。